特36
570

東京図書館蔵

宜
許

向井容所
武居重知閲
小谷分喜編輯

御嶽神社縁起略記

小谷氏藏版

御嶽神社縁起略記

小谷分喜編輯

目録

一 信州木曽御嶽山の圖並ふ位置
一 御本社及支社の神名
一 二柱の神は御由来
御嶽の神を祭まつり年代並ふ里宮造營の事
御祭日の畧式

特36
570

東京帝國大學圖書館藏

向井容所閲
武居重知
小谷分喜編輯

宮許

御嶽神社縁起略記

小谷氏藏版

御嶽神社縁起略記

小谷分喜編輯

目録

一 信州木曽御嶽山の圖並ニ位置
一 御本社及支社の神名
一 上社の神は御由来
御嶽の神を祭ること一年代並ニ里宮造
御祭日の畧式

一白川少將及阿古太丸の事
一木曽義昌登山の事
一覺明靈神並に普寛靈神の事
一御嶽神社の神寶
一御嶽神社を拜む詞

目錄終

○御嶽山の位置

御嶽山ハ信濃國西筑摩郡即木曽三岳邨の正西ニ聳ヱ其高さ富士山ニ亞ぎ皇國第二の高山にして四時白雪を戴く山脈三方ニ連亘し北に赴く者ハ飛騨國に属し南ニ亘る者ハ王滝邨三浦山ニ連り美濃國に續き東ハ即三岳邨ニ亘し倉越山及大天幕ニ綿亘れり

○御本社及支社の神名

御本社

御嶽神社　少彦名大神　大己貴大神

支社

之を御山三十八社と稱す

結延神社　朝日見岡神社　國常立神社

冨士見岩神社　伊弉諾神社

豊雲野神社

伊弉冉神社
長田神社
熱田大神宮
伊勢兩皇大神宮
春日神社
香取大神宮
松尾神社
住吉神社
國狹槌神社
諏訪神社
金峯神社
賀茂神社
龍田神社
石清水神社
稲荷神社
北野神社

八坂神社
白川神社
阿古太丸社
熊野神社
天風風神社
夾王子社
飯縄神社
三童神社
氷川神社
利生社
三輪神社
天陸路神社
高良玉垂社
有摩那神社
五行神社
五龍神社

○二柱の神は御由来

少彦名神

亦名 少弁遅神

亦云 少日子神

亦云 少御神

亦云 手間天神

亦云 久斯神

一称 大國主神

亦名 大名弁遅神

大己貴神

亦名 葦原醜男神

亦名 八千矛神

亦名 宇都志國玉神

亦名 大地主神

亦名 大名持神

太古天津神の勅ふ因

此二柱の大神ハ

て兄弟ハ契を結び心を一ふ力を戮

せ我日本をちゞめ諸の國を造ま

呪の法と藥師の方とを始めひ一神等ふして今の世は呪のと医師のと藥のとまゝ温泉はとゝあどを皆此二神の傳へるとゝ然して神の御代ふハこれ日本の主と大國主神よりてれたませし天津神の勅ふ准ひ今は天皇様の御先祖ふ當りまゝへる皇美麻尊よ奉りまゝり又少彦名神ハ酒を釀るとを始めひしのゝ久斯神とゝも申ふり千ちやふる神代ふて酒のとを久斯と申せし故ゝさて此二柱の神は御神徳の大ふることを僅ふある紙ふハ載尽しがゝけれゝ其大畧を書記しぬ

○御嶽の神を祭ること年代並ゝ里宮造営はとゝ

偖此二柱の神を御嶽山に齋奉りしハ

幾千年むかしのことやら知らずふけれど傳へいふ本社は今より九百五十余年の昔時醍醐天皇の延長年中朝廷信濃國司に勅して殿閣を造立せしむと其後天文廿三年本曽義康君の再建しぬ

ひしもいと古さしで迚去る明治七年関東の巴講社ふて造り改め奉りぬ又若宮ハ今より四百九十七年前木曽家

信君乃建立しひし侭ありし姿も亦去る明治十年巴講社ふて再建し奉りぬ神の仁徳はいと尊く著しられバこゝ拝もるゝ東より登る来て斯兩社とも新ふ造り奉れるなり

○御祭日の畧式

往古は御嶽山大權現と称奉りしふ去る明治二年正月御嶽神社と改め奉り

ぬ又御祭日も古来六月の十二日十三日ありしを明治五年大陰暦を廃せられし以来ハ七月の十八日十九日と改まれり其十八日ハ大神を神輿ふ選し奉りて本社より若宮へ行幸しまひ若宮ふて神官數多打集ひ大祭式を執行まれ十九日ふて若宮の境内を氏子乃人々神輿を擔き神樂を奏して行幸

し奉るといへども尊くかしこきことふとを而して十一月二日の午前二時ふ又若宮より本社へ神を密やふふ行幸ふし奉るを故事ふて此夜ハ氏子と虽も途中にて大神と逢ひ奉るをを憚り霄の中より外へ出ることを忌とふ

○白川少将及阿古太丸の事

御嶽の大神の神徳ハ著しきことハ今

始めてとゝあらぜ往古延長年間京都の北白川宿備少将重頼卿年四十く及ぶ迄御子おゝ白しうゞ心細く思召さるゝ折節ふと思ひ付せゝを予曽て聞く御嶽ふ座坐少彦名神は親神皇産霊神と御子千五百座まゝすせゝとさらぜ御嶽乃大神ふ祈りて子を生ずやと夫より朝夕ふ祈誓しまひしうを其

効直ふ著てれて幾程おく男女二人迄生せゝひけ星女子を利生御前と名け男子を阿古太丸と名けゝる夫より数年を經御子寺未ゞ成長しゝハざるゝ母君病の為ふ身まこうりゝれバ重頼卿止とを得ぜ後妻を要りゝふ然るに世の諺よあるごとく継母継子の中のよからぬハ今に始めぬとゝして其後妻と

阿古太丸と睦しう〳〵に動もされを阿古太丸を亡もはふせんあるど謀るふとはなりけれバ阿古太丸淺間敷とおとゝ且思ひ吾父君嘗て御嶽の神ふ祈りて我等を生せゝひしとざしで是より御嶽と参る一にい神徳は御礼を申し又一ふを継母乃心地和めゝちんと祈らんと九重は花の都

を出ぬひとるく木曽の御山と登り大神を礼拝し其帰るさ馴ぬ旅路の疲さへあるゝ風邪の心地ふて病着せゝい日〻増重りてきうぬくも岩郷の板敷野にて身まうらせゝひしうで里人等打集ひて形は如く葬る塚を築き今と阿古太丸の塚とて其地ふあり（板敷野ハ木曽福島村の中ふあるゝ阿古太丸の病着せゝひ一時板を敷てきでし息をせ奉り

しうで板敷野といふ所へさいり
扨又京都にて父
君重頼卿と愛子阿古太丸の一旦家を
出て信濃路に向ふとはそにて更に音
信もなからされを如何ぞ思ひ
思させふ余りに阿古太丸の行先を
尋ね又よし御嶽に詣んとて利生御前
と時常といふ侍一人を伴ひ木曽より御
嶽に登る

（此塚を拝して）

扨又武尾
氏の藏書に其事を記さべ
其時山の中にて昼は飯を遊ませ
を飯盛といふ今乃中小屋の邊ぞ
夫より御湯權現（今の金剛堂なりと）
て暫時息いこふ折ふし利生御前何地
行けん消失せぬ（此時重頼卿及び時常ハ如何せし）
やもぞ古書に
つれだちるさ
故に近き年迄女人
を之を上へと登ることを免さざり

然るふ御一新以来を女人も頂上まで登るとなをかくて重頼卿ハ時常とゝもに頂上さして登らんとしけれども雲霧立覆ひて足もやゝ沈うるとも叶はざりしを何處とも分く霊鳥飛来りて導けるゝ頂上ふ詣り大神を拝そると仏得なへ今れ雷鳥と云ハ即ち是なりきゝて重頼卿御山を降りのふ時扇を遺せし処を扇ヶ森といふ千本松と中小屋との中間ゑ少し石垣を築きて小き祠あり又御山の麓ふ白川少いふ所あり重頼卿ヶ泊ゑひし所ありとて其霊を祀り白川社と称ひていまゝ里人等春秋の祭祀怠ふく営めり

○木曽義昌登山の事

まさ今より三百十一年前よ木曽の領主木曽義昌朝臣其奥方と共に御山と登りなひしとあるは其節名されし浄衣今ふ御嶽神社は神寶とおりて神庫ふ所ふ

○覺明霊神並よ普寛霊神の事

右の如く千年ふ近きむかしより遠き國々の人々まで参登りし御山なれぞ

元より道をおりしうど音ふ聞えし高山みして神稜威も著しかはけれぞ往時い百日精進の上おらでも登山をると出來ざりし因て道を自然よ荒もてよりし伝安永天明の比尾張國より行者覚明ある人ちるく来り麓ふて月日久しく齋戒沐浴し折々登りて今の如く諸人の登り易きやうに道を開き終

天明六年六月廿三日（今より九十六年前）二の池の邊ふて立おのゝ往生せられしを里人等其神体を取修め票塔を建いまゝ覺明霊神と崇祀りて神徳をいとゝふとくありける其節携られし鐃の杖も亦御嶽神社の神寶として神庫ふあり

又此覺明行者の入定しのち后寛政四年武藏國人普寛行者裏山口の道址開けり因りて之を今王滝口ふ普寛霊神と祀り霊験いとあらさなる

○御嶽神社の神寶

一 木曽義仲公四天王の服麻は十徳

一 木曽義昌及奥方登山は節用ひられ浄衣

一 木曽義昌初め諸臣より奉納三十六歌仙の額面

一結城中納言秀康卿簾中の鏡

一神劔四口　来國光作　来國次作　相州正宗作　貞宗作

一覺明靈神の鋏は杖

是等の神寶は神庫ふ藏めありと虽も

信心は人々を神官武居氏よりて願

ひ出れを拝見を許さるゝなり

右の外御神德乃と且古き書物神寶ゑ

とも種々神官武居氏よりを慶長

七年黒澤川は洪水ありて其土藏を押流

しいま傳らざるゝ真ふをしむへき

とゝ

○御嶽神社を拝む詞

真篤苅信濃國西筑摩郡御嶽乃山止里

社止尓鎮座坐須

少彦名大神大已貴大神手始奉里枝宮

枝社ハ坐須神等又御山乃坂路踏分登
參登里奉仕初志人等乃神霊乃御前乎毛
謹美畏恐美恐美母拝奉留
かく申拝て后く人々は思ふことを
願ふと心乃侭ま陳て拝むでー

御嶽神社縁起畧記畢

此書て古事記を始め御嶽の神官武居
氏ふ秘藏せる古き書物ふ因て撰輯る
るもはもあれど
掛巻も畏き御嶽大神の神徳を仰ぐ人
人々も必らび携て朝夕に神を拝む
便ともふし且神徳を潤く世よ知しめ
ん為ふかくそのー侍るるすぎ

明治十四年一月　小谷分喜謹言

明治十四年四月出版御届
同　年七月出版發兌

編輯兼出版人　長野縣士族　小谷分喜
西筑摩郡福島邨四百八十六番地

發兌書林　今縣平民　高美甚左エ門
東筑摩郡松本南深志町二百七十六番地

特36
570

014646-000-1

特36-570

御嶽神社縁起略記

小谷　分喜／編

M14
ABB-1077